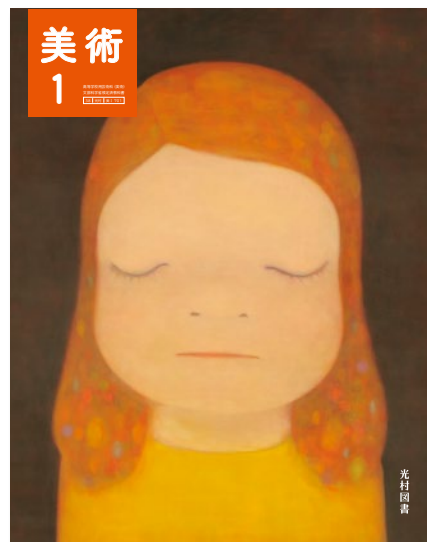


令和6年度版 高等学校 美術教科書のご案内

新 版 教 科 書 が 3 冊 そろいました。

光村の美術教科書では、多様な作家や作品を掲載し、
質の高い鑑賞図版や、色や技法の資料を豊富にご用意しています。
教科書を通して、生徒一人一人の、自由な表現や豊かな鑑賞の実現を目指しました。



『美術 1』 38 光村 美Ⅰ 701

「もっとつくりたい、
もっと見てみたい」



『美術 2』 38 光村 美Ⅱ 701

「美術が、人を、
社会を変えていく」



『美術 3』 38 光村 美Ⅲ 701

NEW 「自分の表現を
追求する」

ウェブサイトのご案内

高等学校美術教科書に関する情報や、
授業づくりに役立つ教授用資料を
随時アップしていきます。
「美術準備室」のバックナンバーや、
美術教育に関連した読み物も
ご覧いただけます。



こちらから
ご覧いただけます。



美術の仕事を紹介

イラストレーター、
スタイリスト、
CGクリエイターなど、
美術に関わるさまざまな職業
全28種類を、4ページにわたり
詳しく紹介しています。



光村図書
ウェブサイト

光村図書

検索



小・中・高等学校
教科書訂正の
お知らせ



光村図書
LINE公式
アカウント
友だち募集中!



美術準備室 No.22

2023(令和5)年5月25日

発行人 ■ 吉田直樹

発行所 ■ 光村図書出版株式会社

〒141-8675 東京都品川区上大崎2-19-9 電話: 03-3493-2111

www.mitsumura-tosho.co.jp

デザイン ■ Better Days (大久保裕文+深山貴世)

印刷所 ■ 梅田印刷株式会社

内 容 解 説 資 料

個人情報の取り扱いに関しては、
弊社「個人情報保護方針」にのっとり、
適切な管理・保護に努めてまいります。
詳しくは、光村図書ウェブサイトをご覧ください。

教育情報誌に関するお問い合わせ先

住所変更・配送停止 ▶ ej1@mitsumura-tosho.co.jp

ご意見・ご感想 ▶ koho@mitsumura-tosho.co.jp

内 容 解 説 資 料

本資料は、一般社団法人教科書協
会が定めた「教科書発行者行動
規範」に則って作成したものです。



特集

美術館の教育普及活動

アトリエ訪問
彫刻家

青木野枝

作家の肖像

グラフィックデザイナー

勝井三雄

この1点

「ニーゼン山」

井上涼

ア ト リ エ
訪 問

第 22 回

青木野枝

彫刻家

鉄という素材に魅了され、
40年以上にわたって鉄を使った彫刻作品を制作している青木野枝。
重たい金属というイメージをもつ鉄を素材に用いながら、
見る者に軽やかささえ感じさせる彫刻作品は、どのように生み出されているのか。
作家人生のほとんどを共にする「鉄」への熱い思いについても語ってもらった。

撮影 永野雅子



制作時間の99パーセントを占めるという、鉄板を切り出していく作業。
青木さんが最も大切にしている過程だ。



アトリエの入り口。扉に書かれた「クマタマ」は、アトリエの名前だそう。



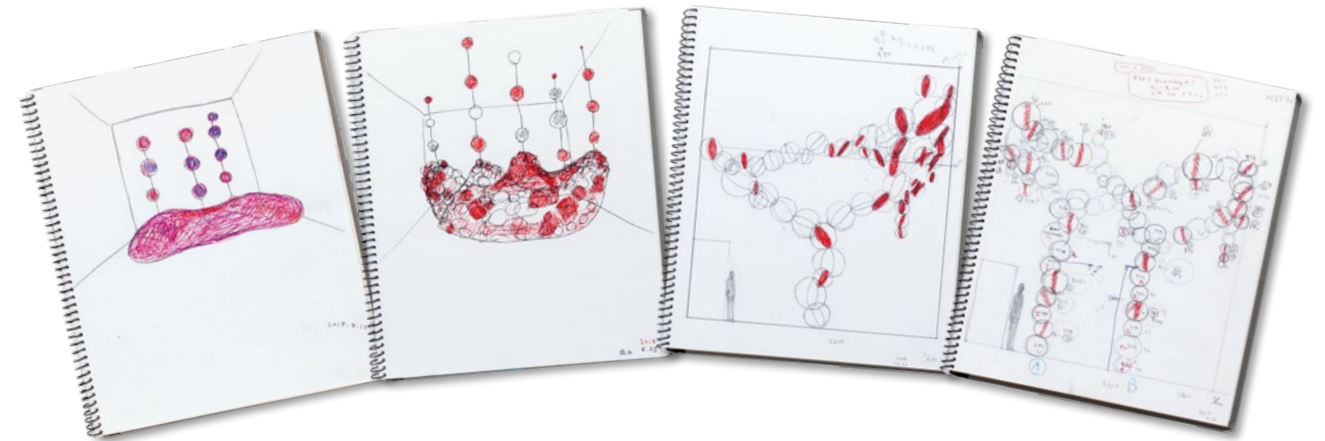
切り出した鉄を組み合わせた、
作りかけの作品。



撮影：山本 紘 ©Noe Aoki Courtesy of ANOMALY



上／スタッフと協力して、
美術館で作品を組み立てている様子。
左／長崎県美術館での展示。
ふりそぐものたち／長崎
鉄、ガラス 高さ580cm 2019年
下／長崎での個展のためのアイデアスケッチ。
制作に入る前に、たくさんのスケッチをして構想を練る。



都心からほど近い場所にありながら、豊かな自然の中に建つ風変りな平屋。そこが、青木さんのアトリエだ。倉庫のようにも見える建物に、一歩足を踏み入ると、その広大さに驚かされた。

—— すごく特徴的で、面白いアトリエですね。

青木 特徴的というか、鳥小屋ですからね(笑)。ここを借りはじめて、40年くらい経ちますが、元々は養鶏場だったんですよ。作品作りに、とにかく広いスペースが必要なので、私にとってはこういった場所がちょうどいいんです。

—— スケールの大きな作品をどのように制作されているのでしょうか。

青木 まずはざっとスケッチというかプラン図を描いて、その中に人物も描き込んで、作品がどのくらいの大きさになるのかイメージします。そして、制作に入ると、ひたすら鉄板を溶断(※)します。制作過程の99パーセントは溶断なので、1日中切っているという感じです。それから、

やっぱり鉄ってすごいなと、やればやるほど思います。

運び出せる大きさまではここで溶接していきます。パーツはトラックで運び、あとは展示場所で足場を組んでつなぎ合わせて、作品を完成させます。大きなものだとなんて47メートルにもなります。

—— 制作過程の99パーセントが溶断ということに驚きます。

青木 私にとって溶断は、画家が線を描くのと一緒のこと。だから、人に任せず、すべて自分でやります。溶断すると、初めてこの世界にそ

の鉄の断面が姿を現し、空気に触れる——。その瞬間が好きで。厚い鉄に熱を入れていくとオレンジ色になって、もっとやっていると白く、真昼の太陽みたいに輝いてだんだん溶け出していく。それを酸素の圧力で切るのが、切らずにそのままにしておくと、周りから冷えていって、中が赤くて外が黒くなっていく。それが半透明に見えるようなときがあり、すごくきれいだな、と昔から思っていて。私にとって鉄は半透明な金属で、重たい素材だという印象を抱いたことはないですね。

—— 長く一つの素材と向き合う中で、考え方などが変わってきたことはありますか。

青木 鉄に対して「尊敬」という言葉がふさわしいのかはわかりませんが、やっぱり鉄ってすごいなと、やればやるほど思います。鉄は水中にも地中にもあるし、隕鉄(いんてつ)という宇宙から来るものもあるし、自分の体の中にも鉄分というものがあって、鉄は昔から身の回りにいっぱい存在していて——。だからなのかな、鉄が、

とにかく大好きなんです(笑)。

—— 高等学校教科書『美術 2』(P.31)に青木さんの作品「ふりそぐものたち／長崎」が掲載されています。どんな思いを込めたのでしょうか。

青木 長崎で個展をする際に制作したのですが、この街にささげるような気持ちを込めています。長崎という街にはいろいろな歴史がありますよね。キリシタンの弾圧とか原爆とか——。長崎のことを勉強しているうちに、実は私の親戚にも長崎の原爆で亡くなった方がいるということがわかって。長い間、それを知らないまま過ごしてきた自分がいて、長崎で個展をするなら、中途半端な気持ちで取り組むわけにはいかないと、思いながら制作しました。

—— 赤いガラスがはめ込まれているのはなぜですか。

青木 直感的に使いたかったのと言語化するのは難しいんですが、色については、長崎のつらい歴史から血をイメージしたのかもしれないし、贖罪(しよくざい)の意味があるのかもしれない。



い。おそらくこの先、他の作品では使うことのない、長崎のための赤なんです。

—— 場所とのかかわりを大切にしたい作品なんですね。

青木 これに限らず、私の彫刻って、展示が終わったら解体して跡形もなくなるんですよ。展示空間に合わせて作るの、同じ作品は二度と作れない。だから、その場所に置くことの意味を大切にしています。

あおき・のえ
1958年東京都生まれ。83年武蔵野美術大学大学院造形研究科修了。第50回芸術選奨文部大臣新人賞、第33回中原悌二郎賞優秀賞、第55回毎日芸術賞などを受賞。活動初期より鉄に魅せられ、40年以上に渡って工業用の鉄板などを用いた“場”と深く呼応する彫刻作品を手がける。国内外で精力的に個展を開催するほか、大地の芸術祭、瀬戸内国際芸術祭などの芸術祭にも数多く参加している。多摩美術大学客員教授。

美術館の教育普及活動

美術館の教育普及活動には、トークイベントや対話型鑑賞などおなじみのものも多いが、
そこでしか体験できないユニークな活動を行っている館も少なくない。
今回は、全国の美術館の教育普及活動の中から、
中高生を対象とした特色ある活動を取材した。



「自分にとっての美術」を発見!

大分県立美術館 (大分県) OPAM美術部

撮影:大橋弘嗣

大分県立美術館では、2021年度から中高生を対象とした新たな教育普及事業として「OPAM美術部」とよばれる活動をスタートさせた。年間を通してテーマを設定し、創作を中心とした活動を月1~2回コンスタントに行うというものだ。

キーワードは「出会い」

2022年度のテーマは「素材と技術」。子どもたちは、植物、金属、土、石、繊維などのさまざまな素材や、それらを活用するための技術に触れていく。そして年度末には、特別プログ

ラム「アーティストとの出会い」に参加。彫刻や特殊照明などの専門家が、素材とどのように対話しているのかを知り、発想を広げるきっかけとする。

プログラムの趣旨について、OPAM美術部発起人の榎本寿紀さん(教育普及室 室長)は、こう語る。「出会いのきっかけを与えるのが大人の役割だと思っています。子どもたちが普段出会うことのない人に、ぜひ会ってほしいという思いから企画しました」。

自分の表現を自由に

取材に訪れた日、子どもたちは、「石膏取り」(*)とよばれる方法で石膏の彫刻を制作していた。しかし、全員が同じことに取り組んでいるわけではない。納得がいくまで粘土の原型をつくり込んでいたら、石膏取りをするより粘土を使って塑造で作品を完成させたいと考えるようになった部員もいれば、石膏の塊から複雑な形を掘り出していく彫造に変更した部員もいる。一方で、早々に石

膏取りを終え、木材や金属、石材など好みの素材を使った作品をいくつも生み出している部員もいる。何ともゆるやかで、自由な活動ぶりについて、榎本さんはこう考える。「大切にしているのは、制作のプロセスや期待感。今回は石膏取りをメインに据えていますが、そこに至るまでに、土の塊を砕くところから粘土づくりをはじめると、素材とじっくり向き合うような活動も行っています。その体験を、自分なりの表現につなげていってほしい」。

OPAM美術部の目指すもの

なぜ、美術館にこのような自由な創作の場をつくろうと考えたのか尋ねると、「多感な時期特有の感性をもつ中高生に、美術館という場で新しい出会いがあったら、お互いのもつパワーがもっと活性化するんじゃないかと思ったんです。『自分にとっての美術』とは何か、みたいなものが見つけられたら、それがいちばん」と、榎本さんは屈託なく笑った。

自分にとって何が魅力で、何が楽しくて、何に心を動かされて、次は何をしたいと思うのか。そんな大切なことが見つかるまで、手を動かしながらじっくり考えられる贅沢な場が、OPAM美術部には用意されていた。



大分県立美術館
大分市寿町2番1号 <https://www.opam.jp/>

OPAM美術部部員の声

OPAMとは、Oita Prefectural Art Museumの略で、大分県立美術館の愛称でもある。

Mさん OPAM美術部には、作品づくりや、作業に没頭することが好きだから参加している。

Tさん 次は油絵を描いてみたい。みんながやっているのを見て、木材の彫刻もおもしろそうだった。

Rさん 学校では、数時間やったらすぐに次の作品へ移っていくけど、OPAM美術部はじっくり時間をかけられるのがいい。

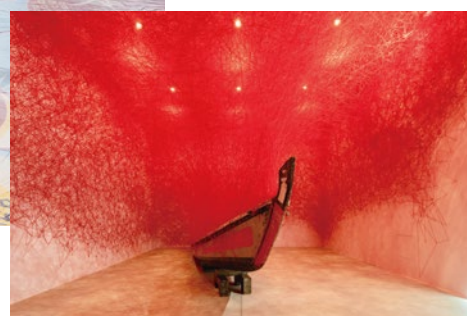
Yさん いろいろな素材を使って作品をつくってみたことで、木が好きだと気づいた。磨くと滑らかな手触りになったり、切り出して好きな形をつくり出せるのが好き。

※石膏取り……粘土で原型をつくり、石膏で型取りする方法。



ワークショップで、 作品の世界を体感！

十和田市現代美術館（青森県） 撮影：長岡博史



水の記憶（塩田千春）
撮影：小山田邦哉 ©2021 JASPAR, Tokyo and Shiota Chiharu

アーティスト×げんび ワークショップシリーズ vol.13 中高生のための休日ミュージアム

2019年から始まった「アーティスト×げんびワークショップシリーズ」は、“げんび”（十和田市現代美術館）でしか体験できない、独創的な教育普及プログラムだ。

ワークショップは こうして生まれた

十和田市現代美術館といえば、草間彌生、奈良美智、ロン・ミュエクなど世界で活躍するアーティストのコミッションワーク(*)による常設展で知られる。そのユニークな展示は多くの話題を集め、開館から15年で来館者数200万人を超える。

そんな中、なぜわざわざ手間のかかるワークショップを開催するのか。同館のエducator青山真樹さん

はその理由を語る。「みなさんに、作品をもっと“味わって”もらいたい。そのために何ができるだろうと考え、そこで考案したのが、常設作品の鑑賞と体験を組み合わせた、体感型のワークショップなんです」。地域で子ども向けのアート教室を主宰している佐貫巧先生（アートイズ代表／八戸学院大学短期大学部 准教授）も同じ思いを抱いていた。「地域の子に、げんびの作品にもっと親しんでほしい。何か力になりたいと思っていたので、すぐに意気投合しました」。

多感な中高生のための プログラム

日曜日の昼下がり、高さ9メートル

ルのガラスに面した開放的なスペースの一画に、市内の中高生5名がやってきた。青山さんとアートイズのスタッフたちが、子どもたちを和やかな雰囲気を出迎える。

今回、子どもたちが鑑賞する作品は、「水の記憶（上写真）」（塩田千春）。古びた木船から無数の「赤い糸」が張り巡らされたこの作品は、人や物との複雑な関係性を表しているようにも見える。ワークショップでは、「赤い糸」を媒介して、自分たちを取り巻く、さまざまなつながり、しがらみを視覚化して浮かび上がらせ、作品世界を自分の感覚で捉え直すことを試みる。青山さんと佐貫先生が、多感な中高生のために考案したプログラムだ。

ワークショップの流れ

1 作品鑑賞



展示室で「水の記憶」を鑑賞。

2 導入ワーク



自分が着ている服にまつわる「つながり」や「思い出」を模造紙に書き出す。

3 ほっこりタイム



お茶を飲みながら、書き出した「つながり」について語り合う。

4 身体ワーク



ダンサーの磯島未来さんのアドバイスのもと、赤い糸を自分の身体に絡ませてみる。



ワークで使用する赤い糸は、「水の記憶」で使われているのと同じもの。



腕が痛そうだね。

支えられているから意外と大丈夫。

Aさんが動くと、私も動かないといけないね。

初めは一人で、次にペアになり、最後はみんなでつながります。

5 解体ワーク



複雑に絡み合った赤い糸から抜け出す。

6 作品鑑賞



もう一度展示室へ。

げんびを 中高生の居場所に

今回で13回目となるワークショップシリーズだが、実は、中高生向けはこの日が初めてだという。しかし青山さんは、以前から「現代アートと中高生は親和性が高い」と考えていたそうだ。「作品を通して、同じ世界に向けられた、自分とは異なるまなざしに気づかされる。そういう意味で、作品鑑賞って他者と出会うことなのかもしれません。自他の間で揺れ動く年ごろだからこそ感じるものがあるはず——」。

佐貫先生にはまた別の願いがあっ

た。「人間関係に敏感な中高生を、思いきり解き放ってあげたいと思っていた。だから今日は、赤い糸から解放される場をつくったんです」。

スタッフそれぞれの思いが詰まったプログラムだが、常に大切にしているのは「答えを出さないこと」という。「作品に決まったひとつの

解はない。だからこそ、すぐに答えを出さずに、立ち止まってぼんやり眺めたり、ぐるぐる考えたり。そんなふうにご過ごすことのできる場所でもありたいんです」。青山さんは真摯なまなざしで語る。十和田市現代美術館には、それを受け入れる懐の深さがあるのだろう。



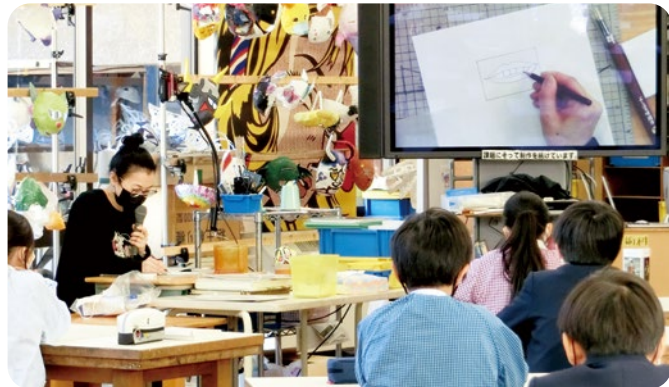
現代芸術教室 アートイズ
青森県八戸市を拠点としたアート教室。子どもが本来持っている発想力を引き出し、何かを表現したりつくり出した過程を大切にしている。

十和田市現代美術館
青森県十和田市西二番町10-9
<https://towadaartcenter.com/>

表現

ワークショップの詳細は、
各館のウェブサイトなどご確認ください。

東京都現代美術館 (東京都)



東京都現代美術館 東京都江東区三好4-1-1
<https://www.mot-art-museum.jp/>

アーティストが行うユニークな出前授業 「アーティストの1日学校訪問」 (年6校／2～3学期)

現代美術の普及と新進・若手芸術家への支援、子どもたちの育成に力を入れる東京都現代美術館では、現在活躍中の現代美術のアーティストが、都内の学校を訪問し授業を行う「アーティストの1日学校訪問」を実施している。

2021年度は、先端的な木版画作品で知られる風間サチコさんが講師となり、小学校4校、高校2校を訪問。「ユーモアを交えながら考えを上手に伝える方法」をテーマに、ふだん生活する中で言いたくても言えないことを、アートを手段にして表現するという授業を行った。アーティストの技巧だけでなく、ユニークな思考なども垣間見えるのが魅力だ。

※「アーティストの1日学校訪問」は、表現と鑑賞の両方の要素を含む取り組みのため、担当アーティストによっては鑑賞中心のプログラムが実施される場合があります。

静岡県立美術館 (静岡県)



静岡県立美術館 静岡市駿河区谷田53-2
<https://spmoe.shizuoka.shizuoka.jp>

1トンの粘土で大きなスケールのものづくりを体験 「ねんど開放日」

世界でも屈指のロダンコレクションを有する静岡県立美術館では、ロダンの作品の原型が粘土で制作されることになって、3歳児から大人までを対象としたワークショップ「ねんど開放日」を開催している。

およそ1トンの粘土を自由に使って遊べる機会とあって、毎回大盛況だ。粘土と触れ合いながら、各グループが個人制作、共同制作など、さまざまなレベルの創作活動を行うことができる。使用される粘土は、陶芸などに使われるにの少ない水粘土というもの。大人も子どもも裸足になって体をいっぱいに使って制作を行う楽しさに、リピーターも多い。

愛媛県美術館 (愛媛県)



愛媛県美術館 愛媛県松山市堀之内
<https://www.ehime-art.jp/>

多種多様な創作活動を応援する 「アトリエ」「アトリエ教室」 (「アトリエ教室」は月4回程度)

「参加創造型的美術館」を掲げる愛媛県美術館は、誰でも自由に利用できる「アトリエ」を開放している。制作可能な種目は版画 (凸版、凹版、孔版、平版)、染め、織り、フェルト、紡ぎ、木工、絵画と多岐に渡る。

また、創作に関する相談や、機材の使い方についてレクチャーを受けることができる「アトリエ教室」は、興味はあるけれど何から始めていいかわからないといった人にもおすすめだ。初めての素材や技法にチャレンジしてみたり、自宅ではなかなか取り組みにくい大型の作品に着手してみたりと、創作の幅を広げるのに役立ちそうだ。

札幌芸術の森野外美術館 (北海道)



清水久兵衛 (ウイング)

札幌芸術の森野外美術館 札幌市南区芸術の森2丁目75番地
<https://artpark.or.jp/shisetsu/yagai-sapporo-art-museum/>

銀世界の中、作品を味わう 「芸森かんじきウォーク」 (冬季限定)

起伏に富んだ自然の中に広がる札幌芸術の森野外美術館では、毎年、1月上旬から3月中旬に「芸森かんじきウォーク」を開催している。雪上を歩きやすくするため、古くから雪国で使われてきた民具「かんじき」を履いて、雪中の野外美術館を自由に散策することができるイベントだ。

大自然の中に展示された作品の多くは、作家自身が実際に当地を訪れ、地形や周囲の状況、気候などをもとに「その場所のために」制作した作品だという。季節やその日の天気によって作品の見え方が変わるの、野外美術館の醍醐味。運がよければ、かわいらしい小動物に遭遇することもあるそうだ。

京都市京セラ美術館 (京都府)



京都市京セラ美術館 京都市左京区岡崎円勝寺町124
<https://kyotocity-kyocera.museum/>

美術館スタッフと談話を楽しむ 「ぼよんタイム」 (不定期開催)

京都市京セラ美術館では、2020年のリニューアルを機に教育普及活動を「ラーニング・プログラム」へと改名。「“教える”から“学びあい”へ」をキーワードに、さまざまなプログラムを実施している。

中でも特徴的なのは、ラーニングの拠点である談話室に、美術館スタッフが在室する時間を設けた「ぼよんタイム」だ。対話を楽しみながら、一人一人に合った美術館の過ごし方を一緒に考えることができる時間として、誰にでも開かれている。美術館のおすすめの楽しみ方についてたずねたり、美術に関する素朴な疑問をぶつけたりと、スタッフに積極的に話しかけてみよう。

大原美術館 (岡山県)



写真・大原美術館提供

大原美術館 岡山県倉敷市中央1-1-15
<https://www.ohara.or.jp/>

美術館を貸し切り 「学生団体向けイブニングツアー」 (閉館後)

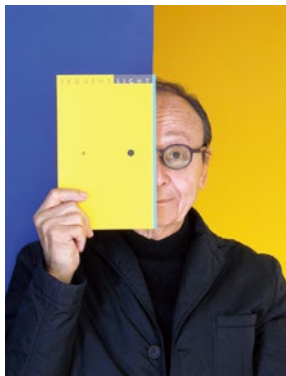
日本で最初の西洋美術中心の私立美術館として知られる大原美術館は、学生団体向けのイブニングツアーを開催している。

これは、閉館後の1時間限定の特別な鑑賞ツアーで、30名以上の学生団体として事前に申し込みをすることで実施される。プログラムの内容は、同館について10分程度レクチャーを受けた後、館内を自由に鑑賞できるというシンプルなものだが、自分たちだけの貸し切りで作品が鑑賞できるのは、貴重な体験になりそうだ。閉館後の美術館に入れるという特別感もうれしい。平日、休日問わず大変なごにぎわいを見せる大原美術館のいつもと違う姿を、生徒と先生だけで贅沢に味わおう。

作家の肖像

第 22 回

このコーナーでは、
毎回一人の作家を取り上げ、
美術評論家の酒井忠康先生に、
お話をうかがいます。



1931-2019
勝井三雄

かつい・みつお
1931年東京都生まれ。グラフィックデザイナー。武蔵野美術大学名誉教授。東京教育大学（現・筑波大学）教育学部芸術学科卒業。味の素広告制作室を経て、61年に勝井デザイン事務所を設立。63年、東京オリンピック組織委員会デザイン室に参加。70年、大阪万博でアートディレクターを務める。光村図書高等学校『美術』の編集委員・アートディレクターを務めた。2019年8月、87歳で死去。

クールで熱い人柄

勝井さんとは、ともに光村図書の美術教科書の編集に携わるメンバーとして、お仕事をご一緒する機会に恵まれました。編集会議の席で、洒落た眼鏡をかけた勝井さんが照れるように笑う様子を、今でもよく覚えています。

編集会議の間では、どちらかというと単刀直入に意見を述べる方でした。しかし、それは単なる自己主張ではなく、非常に的確に物事を判断して、淡々とお話しになっていた印象があります。

若々しく、洒落た佇まいはクールに見えましたが、外見に表れないエネルギーや情熱が内側に満ちていたことは、勝井さんの作品からもよくわかります。

「粋」という美意識

2019年の春、宇都宮美術館で開かれた企画展「視覚の共振・勝井三雄」が、生前の勝井さんにとっての最後の個展となりました。開催初日に私も会場に足を運びましたが、まさに圧倒される思いでした。一人のグラフィックデザイナーの生涯をかけた仕事を一望でき、たいへん心地よい空間でした。

勝井さんは、日本橋の薬卸問屋に生まれたと聞きます。つまり、生粋の江戸っ子なわけですが、勝井さん自身も「粋」という日本特有の精神性を拠り所にしていました。

高校生の頃、哲学者・九鬼周造の著書『「いき」の構造』(※1)を読み、日本特有の美意識にたいそう影響を受けたそうです。日本橋生まれという勝井さん自身の内なるアイデンティ

ティーとも呼応したのでしょう。

私には、正方形の抽斗で敷き詰められた薬筆筒のイメージが、勝井さんの幾何学的なパターンを用いたグラフィックデザインと、どこか重なるようにも思えます。

視覚への探究

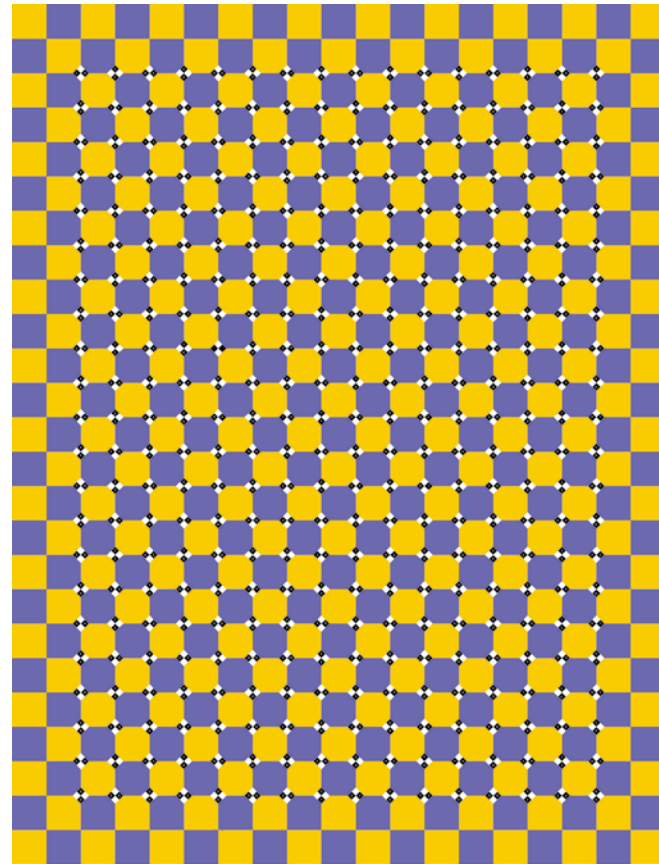
グラフィックデザインの世界はテクノロジーが日進月歩で、日々進化する技術に作家が振り回されてしまうことが少なくありません。しかし、勝井さんの仕事ぶりを見てると、決して振り回されていないことが伝わります。目まぐるしい変化の中にゆらゆらと身を漂わせながら、新しいデジタル技術やコンピュータに寄り添って仕事をされていたように思います。

勝井さんは五感の一つである「視覚」を追究し、目で見ることのおもしろさ、奥深さの極致を体現した作家です。「錯視狂」という作品がありますが、これは錯視現象という人間の目の不確実性を扱った作品です。カメラと違って、私たちの肉眼は機械ではないので、無意識に対象に修正を加えたり、補正したりする。勝井さんは、そんな人間の目の不確かさを、遊ぶように実験していたのでしょう。生涯を通して、視覚世界への挑戦を続けたグラフィックデザイナーでした。(談)

※1 『「いき」の構造』(1930年・岩波書店)
「いき(粋)」という日本独自の美意識の構造について考察した哲学者・九鬼周造の著書。

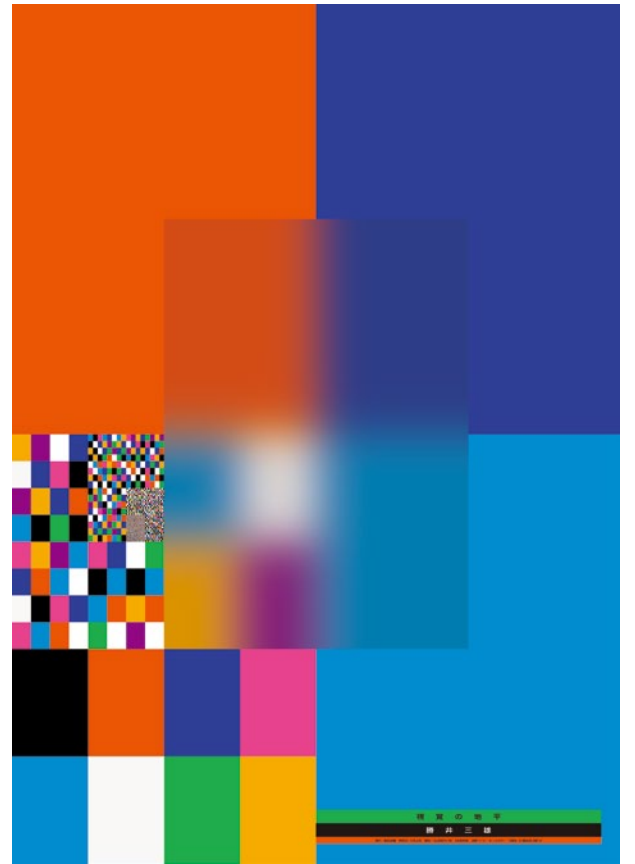
酒井 忠康

さかい・ただやす
世田谷美術館館長、美術評論家。
1941年北海道生まれ。慶應義塾大学卒業。
神奈川県立近代美術館館長を経て現職。
光村図書中学校『美術』代表著者。



「錯視狂 FONT-F」ポスター

2001年
視覚心理学を研究している北岡明佳博士(立命館大学)のパターンを用い、錯視現象の中から文字を浮き上がらせることに挑んだ作品。



「作品集『視覚の地平 visionary∞scape』」ポスター

2004年
モニター上の色も、距離を近づけたり、スケールを大きくしたりすれば、微細なピクセルの集合体であるという、視覚の仕組みとデジタル技術の交錯を表現した作品。
第7回亀倉雄策賞受賞作。



「『スペイン偉大なる午後』奈良原一高写真集」

1969年 求龍堂
生前に親交の深かった写真家・奈良原一高の写真集のデザインを手がけた。
写真展として発表された内容を、本の形に再構成している。





1915 250 Der Niesen

第 22 回

「ニーゼン山」

パウル・クレー

厚紙、紙、水彩 17.6×26cm 1915年
ベルン美術館蔵(スイス)

Kunstmuseum Bern, Hermann und Margrit Rupf-Stiftung c/o DNPartcom

※中学校教科書『美術 2・3』P.6-7 に掲載

クレーのニーゼン山に行きましょう

この絵を見た後に「ニーゼン山」とネットで検索してみしてほしいのです。パウル・クレーが描いたこの絵と並んで、スイスのニーゼン山そのものの写真も出てきます。きれいな三角の形をしている大きな山の写真が。

それを見てからクレーの「ニーゼン山」に目を戻すと、絵の中の三角が実際のニーゼン山にそっくりな形で描かれていることがわかります。末広がり山の稜線の角度とか、山が大きすぎて周囲に同じ大きさのものがない感じ。そして空の色になじむような青い色に映っているところ。そんなようなところが似ているのです。クレーの絵の山は線にすると3本くらいで表せそうなほどシンプルに描かれていますが、本当の山の姿に似せて描こうとしたのがわかります。なんでもクレーはスイスの生まれで、若いころにはニーゼン山の近くに滞在する機会も多かったそうです。よく見慣れていたから、「ニーゼン山を描くならこのくらいの角度で、絵の中に入れるならこれくらいの大きさでなければ～」という感覚をもって、シンプルでありつつも似

せて描けたのかもしれません。

さて、三角が実在の山に似せて描かれていると思うと、今度は山以外のものも気になってこないでしょうか。山を取り囲むように、きいろ、みどり、ピンク、グレー、いろいろな色の縦に伸びた四角みたいなものが積み上がっています。絵の下側を地面とするならば、足元にある緑のふわふわは草に見えてきます(海苔に見えなくもないけど)。まんなかあたりには黒くて枝分かれした硬い植物のようなものが小さくによきっと生えています。北海道に行ったとき、街に生えている木が私の住む東京とはちがうのを見つけて、遠くに来たんだなと実感したことがあります。絵の中のこの見慣れない植物はスイスにしか生えていない何かなのでしょう。色がにぎやかな足元と逆に、絵の上の方は暗く静かな色合いです。空がまだ夜なのかもしれません。もしくは、夜が明けたばかりで足元から世界が照らされていくところなのか。季節はいつでしょう。草木が色づく春なのか、厳しい冬の前に植物が盛り上がりを見せる一瞬の秋なのか。スイスの冬は寒そうですね。

この絵は図形のように描かれながら、奥行きをもち、さまざまに想像の旅行を始めさせるのです。

アーティスト。1983年兵庫県生まれ。2013年より世界の美術を歌とアニメで紹介するNHK Eテレの美術番組「びじゅチューン!」で作詞、作曲、歌、アニメを担当。毎日小学生新聞でまんが「井上涼の美術でござる」を連載中。

井上 涼
いのうえりょう